JACLaP NEWS

JAPANESE ASSOCIATION OF CLINICAL LABORATORY PHYSICIANS

[Homepage] http://www.jaclap.org/

No.104／2009.8

行事予定　　（2009 年）

8月26日（水）　第 4 回常任・第 3 回全国幹事会、第 34 回総会および講演会
10月 2日（金）　第 5 回常任幹事会
12月18日（金）　第 6 回常任幹事会

【目次】

p.1　巻頭言
p.2　事務局からのお知らせ、平成 21 年度の行事予定のお知らせ、ASCPaLMからのお知らせ、教育セミナー報告、平成 21 年度第一回総会について
p.3　第 19 回日本臨床検査専門医会春季大会報告、今後の春季大会日程、会費納入について、住所変更所属変更に伴う事務局への通知について、会員の声：臨床検査専門医試験を終えて
p.4　臨床検査専門医認定試験受験・末記、検査専門医試験を受験して
p.5　私と臨床検査専門医、臨床検査専門医受験顛末記
p.6　編集後記

ダックスフンド（具満タンより）

巻　頭　言

日本臨床検査専門医会
常任幹事　村田　　満

昨年は米国発の金融危機が世界を襲い、我が国でも株価が暴落し多業種が未曾有の大不況に陥っています。医療への影響は遅れて出現する、と言われますが、既にその影響はいたる所に出現しているようです。一方、人口の減少、少子高齢化などへの懸念から医療費の抑制政策が長期に渡って行われた結果、医師不足をはじめ周産期医療、救急医療、地域医療の崩壊がおこり、医療界は別の意味で危機的な状態にあります。医学部の定員増加などの処置がとられていますが、回復には相当な時間がかかるのではないでしょうか。

一方、臨床検査に目を向ければ、昨年から臨床検査科の標榜が可能となり、また検体検査管理加算の増点、外来迅速検査加算など、医療全体が厳しい状況の中ではそれなりの評価がされているとも受け止められます。このような中で臨床検査専門医は何をすればよいのでしょうか？昨年から渡辺会長のご指示で臨床検査専門医在り方委員長を仰せつかり、専門医を国民にわかりやすくする方策（専門医の役割は何か、世の中にどうアピールするか）、専門医の標榜、臨床検査科の標榜との関連、管理医とのすみ分け、専門医であることが必須である（求められる）事項は何か、その他、より具体的に「専門医による精度管理」を保健点数に反映させる方策や教育研修カリキュラムなどについて、多くの委員の先生方とディスカッションする機会を得ました。我が国の専門医制度は公的に機能する制度ではなく、多くの学会が独自に立ち上げて認定してきた私的な認定医・専門医制度であり、医療の中に位置づけられたものではありません。臨床検査専門医が先頭に立って公的に機能する専門医（専門医でなければ行えないこと）を打ち立ててゆくことが今後必要かもしれません。

日本臨床検査医学会は基本領域の 18 学会中、実際に専門医が存在する 17 学会の中では唯一専門医の広告が認められていない学会です。臨床検査そのものの存在価値は強調してもしすぎることはないのに、その社会的評価は必ずしも充分とはいえません。医学界のみならず広く社会にその identity を高めるべく、今後とも地道な努力を重ねてゆく必要性を感じています。

JACLaP NEWS 編集室　　金子　誠（編集主幹）
〒113-8655 東京都文京区本郷 7-3-1　東京大学医学部附属病院 検査部内
TEL: 03-3815-5411 内線 35005/Fax: 03-5689-0495
E-mail: *mkaneko-kkr@umin.ac.jp*

事務局だより

【事務局からのお知らせ】

《会員動向》
2009 年 7 月 1 日現在数 706 名、専門医 555 名
《新入会員》（敬称略）
前島　新史：独立行政法人国立病院機構東京医療センター
研究検査科
井上　克枝：山梨大学大学院医学工学総合研究部
臨床検査医学
井村　穣二：獨協医科大学 病理学（人体分子）
中山　智祥：日本大学医学部病態病理学系
臨床検査医学分野
北村　淳子：愛知県がんセンター中央病院
遺伝子病理診断部
櫻井　宏治：旭川厚生病院 臨床検査科
清水　　力：北海道大学病院 検査・輸血部
中村　靖司：和歌山県立医科大学医学部 臨床検査医学
杉山　大典：神戸大学附属病院 検査部
川村眞智子：がん・感染症センター都立駒込病院
下川　高賢：名古屋掖済会病院内科
西村　邦宏：神戸大学 立証検査医学講座
仙谷　和弘：広島大学大学院医歯薬学総合研究科 分子病理
杉浦　哲朗：高知大学医学部 病態情報診断学
川島　篤弘：国立病院機構金沢医療センター
《所属・その他変更》（敬称略）
河合　　誠：旧　東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科
新　東京共済病院消化器内科　部長
小山　徹也：旧　獨協医科大学病理学・病理部 教授
新　群馬大学大学院　病理診断学 教授
堀川　龍是：旧　三菱重工業(株)健康管理センター
新　三菱重工大倉山病院
西堀　眞弘：旧　国際医療福祉大学医療経営管理学科 准教授
新　国際医療福祉大学医療福祉・マネジメント学科 教授
真理谷　靖：旧　青森県立中央病院 臨床検査部 部長
新　岩手県立中央病院 放射線治療科 中央放射線部 次長
松熊　　晋：旧　中部方面衛生隊
新　自衛隊中央病院 診療技術部病理課
加藤　　圭：旧　航空機動衛生隊
新　防衛省統合幕僚監部（兼）防衛医大病院
高橋　　玲：旧　京都大学医学研究科 病理系腫瘍生物学（第二病理） 准教授
新　同志社女子大学薬学部 医療薬学科 教授
村上　一郎：旧　総合病院岡山市立市民病院 臨床検査科 部長
新　鳥取大学医学部 分子病理学分野 准教授
熊坂　一成：旧　日本大学医学部臨床検査医学教室 准教授
新　上尾中央総合病院 臨床検査科科長（兼）感染制御室長
松野　容子：旧　Biology, City of Hope National Medical and Beckman Research Institute
新　新潟大学医学部 検査診断学
堂本　英治：旧　自衛隊呉病院（兼）海上自衛隊呉衛生隊医務室
新　自衛隊中央病院 診療技術部病理課
藤田　　進：旧　東京医科大学 臨床検査医学講座
新　綾北病院
《退会会員》（敬称略）
黒川　敏郎：富山県立中央病院 血液内科
（2008 年 12 月 13 日）
岩崎　泰正：高知大学医学部内分泌代謝・腎臓内科
（2008 年 12 月 22 日）
新谷　和夫：ご自宅（2008 年 12 月 31 日）
福井　順一：ご自宅（2008 年 12 月 31 日）
川村　　武：宮城大学看護学部（2008 年 12 月 31 日）
丸山　雄造：ご自宅（2008 年 12 月 31 日）
菅　　栄：開生会かいせい病院（2009 年 3 月 31 日）
田代　成元：田代消化器科病院（2009 年 3 月 31 日）
飯村　康夫：飯村医院（2009 年 3 月 31 日）
伊藤　　啓：ご自宅（2009 年 5 月 8 日）
星田　義彦：ご自宅（2009 年 5 月 8 日）
《訃報》
福岡　良男　先生　日本臨床検査専門医会　有功会員
平成 21 年 1 月 8 日ご逝去
深津　俊明　先生　日本臨床検査専門医会　全国幹事
（名古屋掖済会病院 臨床検査部　部長）
平成 21 年 5 月 10 日ご逝去
心からご冥福をお祈りいたします。

【平成 21 年度の行事予定のお知らせ】

平成 21 年度 日本臨床検査専門医会の行事予定をお知らせいたします。
なお変更が生じた場合は、JACLaP WIRE 等でお知らせします。その都度ご確認ください。

平成 21 年
第 4 回常任・第 3 回全国幹事会　8 月 26 日（水）
第 34 回総会および講演会　8 月 26 日（水）
開催場所：札幌コンベンションセンター
第 5 回常任幹事会　10 月 2 日（金）
開催場所：日本臨床検査医学会事務所
第 6 回常任幹事会　12 月 18 日（金）
開催場所：日本臨床検査医学会事務所

【ASCPaLM からのお知らせ】

ASCPaLM2009（第 10 回アジア病理・臨床検査医学連合学会が 9 月 10 日および 11 日の両日、モンゴルのウランバートルで開催されます。
詳細はホームページ http://www.ascpalm2009.mn/ をご覧下さい。

【教育セミナー報告】

第 75 回教育セミナー
平成 21 年 5 月 17 日、昭和大学医学部にて木村聡准教授の担当で、20 名が参加して行われた。
本年度開催予定の教育セミナーは全て終了いたしました。来年度の教育セミナーについて 12 月以降に予定および内容が決定する予定です。決まり次第会員の先生方に通知する予定ですが、それ以前のお問い合わせに対してはご回答できませんので、ご了承ください。

【平成 21 年度第一回総会について】

第 19 回日本臨床検査専門医会春季大会時に平成 21 年度第一回総会が開催されました。
会場：富山国際会議場　大会議室
日時：6 月 13 日（土）　12 時 50 分～13 時 15 分
報告事項
1. 各委員会報告
① 資格審査・会則改定委員会

② 情報・出版委員会
③ 教育研修委員会
④ 渉外委員会報告
⑤ 保険点数委員会
⑥ 臨床検査専門医在り方委員会
2. 会長・監事選挙について
3. 第 20 回春季大会について（詳細は下記に記載）
4. その他
日本臨床検査専門医会事務所 事務職員の交替について。
審議事項
第一号議案：平成 20 年度決算（No.102 に掲載）が承認されました。
第二号議案：平成 21 年度予算の一部修正案が以下の通り提示され、承認されました。
PC 更新のため設備を 10 万円から 25 万円に増額する。
第三号議案：幹事会にて第 21 回春季大会の大会長に岩手医科大学の諏訪部章 教授が推薦され、承認されました。

【第 19 回日本臨床検査専門医会春季大会報告】

第 19 回日本臨床検査専門医会春季大会は 6 月 13 日（土）に富山国際会議場にて開催されました。シンポジウム、二つの特別講演、ランチョンセミナー、R-CPC がプログラムとして組まれ、活発な討議が展開されました。北島勲大会長のもと約 100 名の参加者があり、盛会のうちに終了しました。

【今後の春季大会日程】

第 20 回日本臨床検査専門医会春季大会
大会長 大田俊行 教授
（産業医科大学病院 臨床検査・輸血部）
日 時 平成 22 年 6 月 4 日（金）、5 日（土）
場 所 北九州国際会議場（福岡県北九州市小倉北区、
JR 小倉駅から徒歩 5 分）

第 21 回日本臨床検査専門医会春季大会
大会長 諏訪部章 教授
（岩手医科大学医学部 臨床検査医学講座）
日 時 平成 23 年 6 月 10 日（金）、11 日（土）
場 所 アイーナ（いわて県民情報交流センター、
http://www.aiina.jp/ ）
内 容 未定
備 考 この日は馬に乗った子供たちが市内を練り歩く盛岡名物「ちゃぐちゃぐ馬コ」（http://www.vill.takizawa.iwate.jp/chag）が開催されます。ぜひたくさんの参加をお待ちしております。

【会費納入について】

今年度も半年が経過しましたが、本年度会費をまだお支払い頂いていない先生もいらっしゃいます。会費未納の先生は、至急お振込ください。
なお、振り込み用紙をなくされた先生は、
年会費 1 万円
郵便振込口座：00100-3-20509
日本臨床検査専門医会事務局
までお願いいたします。また、ご自身の振り込み状況が不明な先生は、事務局まで E-mail または FAX でお問い合わせください。

【住所変更・所属変更に伴う事務局への通知について】

最近、住所・所属の変更にともなって定期刊行物、JACLaP WIRE など電子メールの連絡が着かなくなる会員が多くなっています。
勤務先、住所および E-mail address の変更がありましたら必ず事務局までお知らせ下さい。
勤務先、住所の変更は、本年度会費の振り込み用紙に記載するか、できればホームページから会員登録票をダウンロードしてそれに記載し FAX あるいは E-mail でお送りください。

【会員の声】

臨床検査専門医試験を終えて

島根大学で検査部長を拝命しております長井といいます。昨夏行われた専門医試験に合格させて頂く事ができ、有難う御座いました。40 代後半となったこの歳で、試験を受けることになろうとは思いもよらなかったことですが、臨床検査全般について学ぶことができ、貴重な体験となりました（直前に詰め込み勉強をしたために、頭痛がする程でした）。検査専門医は常に検査法から検査の意味までを理解して、検査部運営・指導に携わることができることが必要と思います。その意味でも、専門医試験は検査全般の領域を網羅しており、必要不可欠であると実感しました。ただ、神経内科出身の私としては、莫大な勉強範囲に呆然とし、神経生理の出題もあればと思わざるを得ませんでした。いずれにしろ、検査技術の進歩する今日で、臨床検査科の標榜も認可されており、検査の意味づけを理解し説明できる医師の必要性が増すと思われます。益々、専門医会での教育活動に期待を寄せたいと思います。

私は、卒業以来、神経内科診療に従事してきましたが、脳アミロイドアンギオパチーに沈着するシスタチン C というタンパクの研究や、最近では神経幹細胞による脳梗塞治療の基礎研究を行っています。やはり、脳卒中の危険因子や遺伝子異常について研究を進めている臨床検査医学講座に誘われ、同時に検査部所属となりました。さらに、平成 19 年 4 月より検査部長に任命されました。医師になって以来検体検査業務とは無縁の道を歩んできたために、この 2 年は検査部を把握するというよりは、業務をこなすだけで精一杯でした。ようやく、少しずつ検査部が見えてきた気がするのですが、他院もそうであるように、検査部は個々の検査技師の技量と互いに補い合う力の総和として成果を発揮し、外部からも評価されると思います。当院の検査部も技師長、副技師長、主任を始めとして、団結して業務に当たる体制が確立されており、非常に人間らしい愛すべき集団だと認識しています。他科の先生方の指導の元、検査関連の研究だけでなく、動脈硬化の危険因子についての研究など、興味を持って進めています。私は力不足ですが、技師の検査業務の忙しい中、彼らがさらに研究に没頭できる環境を準備できればと思っています。

平成 20 年 6 月には、当大学のある出雲市で第 55 回国立大学法人検査部長会議を主幹することができました。―その後に試験勉強を始めたもので、私のために試験の平均点が下がったのではと危惧しています―新米部長にとって気の重い会議でしたが、検査部の運営について学ぶ絶好の機会であったとも言えます－先輩部長、技師長の先生方に多くの顰蹙を買ったと思いますが、優しく教えて頂き、全国の病院検査部での問題点について勉強できました。検査部経営は勿論のこと、検体管理加算、研究協力、遺伝子検査、保存検体の取扱

い、さらに臨床検査科標榜など、検査部の直面する問題は山積しており、当大学も例に漏れません。このような会議での議論が、もっと多くの検査関連職員を集めた会議で討論されれば、さらに活発な意見が集約される気もします。

力量不足の検査部長ですが、検査部を間違った方向へ導くことだけは避けたいと思っています。そのためには、全国の検査部の動向が把握できる環境が必要で、さらに何が正しい方向性なのかを議論する必要があると実感しています（特に、当大学のような情報の得にくい地方では）。そのために、臨床検査専門医の増加と専門医会の充実、さらに臨床検査管理医制度の確立を期待しています。その流れの中で、当大学の検査部も進歩を続けて行く事ができれば最高です。臨床検査について着実に勉強を重ねて行きたいと思いますので、今後も、専門医の先生方のご指導を御願いいたします。

（島根大学医学部臨床検査医学　長井　篤）

臨床検査専門医認定試験受験・末記

日常業務に追われ、延ばし延ばしにしていた臨床検査専門医試験もやっと何とか終わり、先日名古屋の臨床検査医学会総会で立派な認定証もいただき、この原稿を書きながら試験準備に追われたこの数ヶ月を振り返っていました。

学生時代から、血液学に興味があり、血液塗抹標本の形態観察からその病態の診断・治療に至るダイナミックかつ緻密な思考過程に魅かれ、将来は血液内科医を目標に考えていました。その前に血液病理の基本的な勉強をしたいと思い、現在の病理学教室に入局し、気が付いたらあっという間に 20 数年が過ぎてしまい、今では病理の仕事に追われる毎日です。大学卒業時の血液内科医の夢ははるか彼方に遠のいてしまったとはいえ、診断業務の半分は、骨髄のクロット標本や、リンパ節生検標本で占められており、血液学に関係したところで仕事をしており、血液検査室には日頃からお世話になっていました。

以前より、専門医資格を取るように周りからも勧められてはいましたが、受験資格取得までに時間がかかることと試験準備もままならない状況を口実にして(本当はものぐさな性格だけですが)なるべく近づかないようにして今まで避けてきたものの、一念発起して、受験の決意を新たにしたのが、平成 19 年の年末でした。4 月、5 月の検査専門医会の教育セミナーを申し込んだとはいえ何をどのように準備していいかもわからず、まずは臨床検査の諏訪部教授にお願いして、新人研修医の先生達と一緒に臨床検査のセミナーを受けることから試験準備を始めました。研修医の先生達の奇異な興味の眼を背中に感じながら、午後仕事の合間を縫っての検査室へ通う生活が始まりました。血液塗抹標本はともかくとして、血液生化学、尿検査、輸血、細菌検査は学生時代の知識を思い出すことからのスタートで、苦労しました。教育セミナーは春の学会シーズンとも重なって、週末は出張の連続でした。臨床検査の教科書も新しく一冊買い求め、初めから勉強することにし、出張病院でも病理診断が終わった後で、同じフロアーの検査室に出掛けて準備を進めました。

初めはやるべきことの多さに、試験のゴールが手の届かないはるか彼方に見えましたが試験勉強で得られる知識は実際の業務に役立つものばかりで、時間のやり繰りは大変でしたが結構楽しみながら準備を進めることができました。輸血検査の実技も丁寧に教えてもらい、採血手技についても実際に副技師長さん自ら練習台になっていただき助けてもらいました。教育セミナーで知り合いになった先生方とも過去問題の情報交換をしながら試験本番に臨みました。

試験当日、筆記試験は頭一杯に詰め込んだ知識を吐き出すように解答用紙に向かってひたすら鉛筆を走らせました。翌日の実技試験では、採血手技の際に緊張のあまり酒精綿を取り違えたり、口答試問で一瞬頭が真っ白になりながらも、なんとか終了できました。今こうして振り返ってみると、いずれの試験も基本的な問題ばかりで、中には初めて経験する手技もあり、試験自体が大変勉強になり、試験準備にあたられた各試験委員の先生方やスタッフの方々に改めて御礼申し上げる次第です。

またいつもの日常業務に追われる毎日です。大学の機構改革により、この 4 月より診断業務は病理診断科として臨床部門のなかに組み入れられました。今後は、検査専門医としての資格を活用し、検査部門と協力しながら、診断精度の管理向上をさらに図り、大学病院としての良質な医療の提供に少しでも役立てればと考えています。諸先生方のご指導よろしくお願い申し上げます。最後に今回の受験に際しまして、お世話になりました臨床検査の諏訪部 章教授はじめ、臨床検査部の技師の方々に心より御礼申し上げます。

（岩手医科大学医学部病理学講座病理病態部門　佐藤　孝）

検査専門医試験を受験して

このたび平成 20 年度検査専門医試験に何とか合格し、専門医会の末席に加えていただきました。若輩者ではありますが、私の持てる知識と行動力を総動員し、検査室運営や後進の指導に関わっていきたいと思います。

私は病理医として研修医・大学院生・大学病院勤務を経て、現在は病床数 800 を超える地方公立病院に勤務しています。当院でも、病理部門と一般検査・生理・輸血・微生物の各部門は密接に関連しており、検査スタッフはローテーションを組んで、病理部門を含む複数のセクションを担当しています。

大学院在籍時から非常勤病理医として複数の病院に勤めてきましたが、検査技師を流動的に運営する病院は数多いもののその方針はさまざまで、病院ごとに勤務体制の特色が感じられました。これらの病院のほとんどで、検査室は臨床各科と良好なパートナーシップを築いているようでした。しかしながら、人員配置変更時などの折々、運営体制には多かれ少なかれ影響が生じます。診療の現場が混乱しかねないほどの運営の危機を経験した現場で、詳細な経験談を聞くこともできました。病理部門も専門性が求められる領域ですが、細胞診検査士をはじめとする、専門的知識・技能を有するスタッフの配置に悩む現場もあるようです。このような経験から、勤務医としても検査室のマネジメントを知っておく必要があると考えておりました。

そんな折、先輩病理専門医の先生が検査専門医試験に見事合格されたことで、「過去問が手に入るから」と私も受験を決意いたしました。直接的動機の不純性はさておき、生半可な知識で合格できる試験ではないとの情報をいただき、検査室スタッフを含む各方面にサポートを頼み込んで、真剣に勉強を始めました。

検査室運営について関心を持っているとはいえ、長く病理学を専攻してまいりましたので、試験前にはもう一度系統立てて検査医学を学びなおす必要がありました。学問的項目はひたすら頭に叩き込み、実技はもっぱら回数をこなすことに主眼を置き、事前実習の不足した分野では脂汗を流しながらの受験となりました。また、臨床検査が現在おかれている状況を学ぶにつれ、検査専門医の責任の重さをひしひしと感じました。自分にしっかり務めることができるかどうかという不安を抱える中、検査専門医の先生方には、受験情報とともに、実際の検査室運営にまつわる苦労と喜びを教えていただくことができました。後者を励みにしつつ、今後も研鑽していこうと思います。

どうにか試験に合格した現在、勤務先でも病理部長をはじめ検査室に関わる多くの先生方にご指導いただいております。これまで病院を引っ張ってこられた先輩方の思想に学びつつ、こちらからも新鮮な情報を提供し、検査部門をはじめとする医療現場に少しでも貢献したく思います。専門医受験前に受講したセミナーにおいても、検査室運営についてのレクチャーを多数用意していただき、非常に勉強になりました。先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻のほど、宜しくお願いいたします。

（豊橋市民病院　榊原綾子）

私と臨床検査専門医

はじめまして。私は埼玉県の越谷市立病院臨床検査科の岡田　基と申します。58 歳です。このたび受験 3 年目にして漸く臨床検査専門医に合格することが出来ました。そのためか、この文章の依頼が来ましたので、自己紹介を兼ねて私と臨床検査との関わりを振りかえってみたいと思います。

まず私は昭和 53 年杏林大学を卒業後直ちに順天堂大学医学部病理学第一講座（福田芳郎教授）に入局しました。ここで 7 年間病理学を学んでいる時に、当時越谷市立病院の副院長兼臨床検査科部長であった谷中　誠先生から声がかかり、「体調を崩したので、病理の仕事を手伝って欲しい」と言われました。私も当時は一人で病理をやってみたいと思っていたのと、私の田舎は越谷市にほど近い八潮市と言う所なので、一家全員で八潮に戻りそこから通勤するのも悪くないと思い喜んでこの話を受ける事にしました。実際は医局から市中病院に常勤医として人を出すのは随分久し振りの事だったので、1 年間医局の数人の同僚で週 2 回ずつ回し様子を見て、翌年昭和 61 年 4 月から晴れて常勤医として勤務する事になりました。当初の予定では谷中先生と一緒に勤務して病理部門の補佐をする事になっていたのですが、実際は谷中先生がご都合で入れ替わりに退職なさってしまわれたので、常勤医は私一人になってしまいました。この際、元来は臨床病理学講座のポストだったので、当時の順天堂大学臨床病理学講座の教授であった林　康之先生に挨拶に伺ったところ、「宜しく」と励まされました。「臨床病理の方は佐藤尚武先生に週 1 回行ってもらうから、そっちの方は安心して」と。そこで骨髄像、免疫電気泳動、その他の検査の事は佐藤先生に御願いする事にして、私は病理に専念する事にしました。この時点で認定病理医、細胞診指導医だったのですが、臨床病理学会にも入会しました。谷中先生や石　和久先生から良く「病理、細胞診、臨床病理は三種の神器だよ」と聞かされていたので、いずれは私もと漠然と思っていました。

はじめの 5 年間は医長だったので、気楽に病理だけやって検査の方は佐藤先生に頼っていましたが、その後部長になり、検査科全体の責任を負うことになりましたので、佐藤先生（時々三宅一徳先生にも来て頂きました）の他に当科の有能な技師諸兄の助けを借りて何とか運営をしていました。検査の方も少しは勉強しなければと思いましたが、同じ頃事情で 5 人の子持ちの男やもめと成り子供の世話・家事全般を一人でやらなければならなくなってしまいましたので、検査の勉強どころか、病理も細胞診も学会に参加することさえままならなくなってしまいました。

すこし経って、お隣の獨協大学越谷病院の森　三樹雄先生から検査専門医会への御誘いを受けましたので、参加する事にし専門医受験も考えましたが、セミナーは大体日曜日なので、家事に忙しく参加するのが困難でした。やがて 10 年ほどして子供達に手がかからなくなってきたので、さて少し勉強できるかなと思っていた所、今度は母が認知症のため介護が必要となり、またまた思うように行かなくなってしまいました。そんな中で 3 年ほど前に一念発起し何とかやりくりしてセミナーに参加し、専門医を受験する事に成りました。セミナーは大いに有益でしたが基礎的知識が全然不足していましたので、試験は全教科に亘って学科・実技共難しく、最初の年は微生物と、血液を何とか通してもらいましたが、翌年は 2 科目のうち生化学だけ合格し、最後に輸血実技のある免疫・血清が残りました。毎年、試験の日が近づくと当院検査室で認定輸血検査技師石上園子主査の特訓を受けたものですが、ここ数年で急速に視力が怪しくなり試験管にキャピラリーの先がちゃんと入っているのかさえおぼつかない状態で、四苦八苦でした。それでも今までに無く練習を重ね、順天堂の本院で三宅紀子先生のご指導を受けた事もあり、複雑難解な検体で無ければ何とかなるかなと思いました。しかし、いざ試験本番になると頭の中が真っ白になってしまい、輸血の実技も完璧には行きませんでした。しかし過去 2 年よりは少し進歩したと見ていただいたためか、何とか合格させて頂けたのは幸いでした。今年一番嬉しかった事です。

専門医は到着点ではなく、これからの出発点と考え、今後本格的に勉強して行きたいと考えています。

（越谷市立病院臨床検査科　岡田　基）

臨床検査専門医受験顛末記

私は昭和 59 年に医学部を卒業しましたので、今年ちょうど 25 年目、年齢も今年で 50 歳になります。卒業後 4 年間、臨床検査学の大学院に進学し、その後 3 年間附属病院の医員として、今の病院病理部門に相当する中央検査部で働きました。また臨床病理学会国際交流基金で、留学したこともあります。その後は大学の病理学教室に移籍し、現在大学は変わりましたが、ずっと病理学教室・病理部に在籍しています。なぜ専門医を受験したのか、それはちょっと政治的な理由もありました。検査部長の定年が近くなり、大学・大学病院の当時の上層部の人から検査部長にならないかとお誘いがあったのです。若いころの検査部在籍の経験や学会の入会歴があるため、何度か受験を考えたことがあったことやそろそろ形態学以外の切り口で疾患を見てみたいと言う思いも重なり（実は年齢を重ねて、標本を見る時の眼精疲労がひどくなった？）受験することにしました。

私の最後の専門医受験は、病理専門医、細胞診専門医を取得した 1991 年ですから、ずいぶん前の話になります。ちょうど息子が大学受験でしたので、良い刺激になればと、「おとうさんも受験勉強がんばっているよ」と言いながら、標準臨床検査医学を購入し、セミナーにできるだけ参加しました。知識は忘却の彼方ですし、時代の移り変わりで検査業務の変遷が著しく、ずいぶん内容が変わっているのに驚きました。大学卒業当時、時代の先端だった DNA 検査はすでに日常化し、検査が医療収入のドル箱だった時代から、検査料の引き下げ、ブランチラボ化により検査の将来に暗雲が漂う時代となりました。しかしそれ以上に自分の記憶力が低下しているのに愕然としました。普段、学生担任として学生諸君に「試験前には丸暗記ではダメで理解して覚えないとだめですよ」と指導していますが、理解しても本を見ないと思い出せない自分がいました。それでも臨床細菌学などは結構面白く勉強できました。顕微鏡で見流している雑菌（失礼！）が、ギムザ染色で綺麗に染めだされるのや、クロスマッチの表裏検査が一致するのにいまさらながら面白いと思いました。日常業務の合間でしたが、大学や市中病院の検査技師さんの迷惑も無視して、教授の特権？で、練習しました（この場を借りて御礼申し上げます）。なるべく受験のことは周囲に知られないようにしましたが、学位取得のため外科病理の研究指導している女医さんにばれてしまい、試験前には大分からかわ

れました。

1 昨年(第 24 回)の受験結果は、実習の甲斐あってか、細菌、血液などは合格しましたが、一般検査のみ落第しました。全体的に成績は思わしくなく、採点でもいろいろ大目に見ていただいたようですが、「検査の感度・特異度・ゆう度比」や「検体の保存と生化学値の変化」など基本的な問題にミスがあり、要するにもう一回勉強の機会を与えるので勉強しろということだったのでしょう。しかしこの辺の勉強は今さらながら大事であると思います。2 年目の昨年(第 25 回)受験の際、面接官が、私の老けた風貌を見ながら「先生は今年も受験ですか？大変ですね。もう 3 回目でしたっけ？」と言ったので、「いいえ 2 回目です」と即答しときました。結果は一科目のみでしたので無事合格しました。

さて、専門医に合格してやれやれと思った矢先、皮肉なことに母校の病理学の教授が急に辞めることになり、後任として病理学講座にもどる(この原稿が出版されるころには戻っているでしょう)ので、検査医学講座への移籍は当面なくなりました。

しかし検体検査と検査医学のことを短時間でしたがもう一度勉強する機会を得て、せっかくですから、専門とする「病理診断学」と検査医学の連携ということを考えてみました。

1. 「病理組織診断」は「検体検査」項目から独立しましたが、病理科が標榜科として認められたと同時に、臨床検査科も標榜科になりました。しかし両科とも標榜科として何をするのか、まだ暗中模索である気がします。「Doctor of doctors」として医療の裏方でその質を支えながら、今度はもう少し診療の前面に出ようとする時期であると思います。むしろ検査科と病理科の相互協力は可能ではないでしょうか？

2. 大勢の技師さんとともに、多くの検体を扱う臨床検査を扱う検査医の広い視点、たとえばその精度管理の方法や病院の診療の変化にマッチした検査業務の対応の仕方は、病理診断(科)も取り入れるべき点があるのではないか？そんな風に思います。

会員の方々とも今後とも是非情報交換したいです。以上私の検査専門医受験顛末記でした。

(獨協医科大学病理学・病理部　小山徹也)

【編集後記】

7 月中に発行する予定であったのが、半月ほど遅れてしまいました。「定期的に出版！」と誓っていたにもかかわらず、まことに申し訳ございません。104 号が送信されるころは、学術集会の準備の真っ只中、また検査専門医の発表の頃、夏休みが終わってしまいそうだ、などいろいろな出来事の最中と思われます。暑さ厳しき折から、益々ご自愛のうえ、皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

インターネットの医療関係ニュースの最近の記事で、「健康診断の異常値が通知されないことは意外と多い。」と米内科学会誌「JAMA」に発表があった、というのを見かけました。インターネットの記事のみで、文献そのものに目を通したわけではないので詳細はわからないのですが、「異常な値をすべて通知している病院がある一方で、不通知率が 26%にのぼる病院もあった。」という記載がありました。私たち検査の専門家が新しい検査の開発や、検査に関わる正確性・精密性をいくら向上させたとしても、せっかく受診して検査されたにもかかわらず結果が通知されないのでは、根本的なところで全く無意味になっていることもあるものだと、痛感させられました。また、診断結果に異常値があり、きちんと通知されて精密検査を行うよう指示されたとしても、受診された方が非常に多忙であり、精査・加療されることなく次の健康診断で再度指摘される、というような事例も日常の中で多々あるかと思います。受診された方への検査の意義、その結果の意味をご理解いただけるように、情報提供を積極的に行うことも、臨床検査に携わる医師としては 1 つの重要な仕事ではないかと認識いたしました。

ここ数回の JACLaP News の会員の声は、前年度に検査専門医になられた先生方のもののみを連続して掲載しております。お願いした先生方には、半年以上、記載時期が遅れておりますことをお詫び申し上げます。また、JACLaP News 会員の声に関して毎回のお願いで大変恐縮ですが、先生方の身近なご意見で成り立っております。現段階では、新検査専門医になられた先生以外の「会員の声」原稿は全く集まっていない状態です。短い文章でもかまいませんので、ご寄稿賜わりますよう重ねてお願い申し上げる次第です。ご多忙のところ、ご負担をお願いすることは心苦しいばかりですが、積極的なご寄稿、何卒ご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

(編集主幹　東京大学医学部附属病院検査部　金子　誠)

日本臨床検査専門医会
会　長：渡辺清明、**副会長**：熊谷俊一、渡邊　卓
常任幹事：
庶務・会計　佐藤尚武、情報・出版委員長　矢冨　裕、教育研修委員長　宮地勇人、資格審査・会則改定委員長　土屋達行、渉外委員長　佐守友博、保険点数委員長　渡辺清明、臨床検査専門医在り方委員長　村田　満
全国幹事：市原清志、今福裕司、大谷慎一、康　東天、木村　聡、熊坂一成、小出典男、犀川哲典、三家登喜夫、舘田一博、橋本琢磨、藤田直久、前川真人、松野一彦、満田年宏、宮澤幸久、保嶋　実、山田俊幸
監　　事：髙木　康、水口國雄
情報・出版委員会　会誌編集主幹：池田　均、要覧編集主幹：木村　聡、会報編集主幹：金子　誠、情報部門主幹：今福裕司

日本臨床検査専門医会事務局
〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台 2-1-19　アルベルゴ御茶ノ水 505
TEL・FAX : 03-3293-5221　E-mail : senmon-i@jaclp.org